

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) デルフィニウムの栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○デルフィニウムの栽培管理 ○シクラメンの育苗管理 <p>3月からは日射量が多く、晴れた日の施設内温度は急激に上昇する。そのため、環境制御装置が自動化されていない施設では、手動換気や遮光資材の展張等により細やかな温度管理を心がける。また、気温の上昇とともに病害虫の発生が多くなるので、初期防除に努める。</p> <p><シネンシス系‘さくらひめ’> —切り花—</p> <p>ア 温度管理</p> <p>最低夜温は10℃を確保する。生育が遅れ気味の場合は、夜温を高めにし、高単価が期待できる3月上旬から4月上旬に収穫できるよう管理する。また、ハウス内の温度が25℃を超えないように換気作業を徹底する。</p> <p>イ かん水・施肥管理等</p> <p>採花ステージのかん水は、花穂の徒長や軟弱化を防ぐため、かん水量を極力控える。しかし、水不足は花の発達の妨げや開花遅れにつながるため、少量多回数に努める。</p> <p>肥料は、採花前から採花中には施用しないが、8割程度採花した時点で、有機配合肥料を窒素成分で6kg/10a施用し、多量のかん水を行い、抽台を促す。ただし、緩効性肥料を施用していれば追肥しない。</p> <p>曇や雨天でハウスを閉めきるときは、換気扇での室内の除湿や循環扇等による植物体の結露防止に努め、灰色かび病等の病害発生を防ぐとともに、植物体からの蒸散を促進することで健全な生育を促す。</p> <div data-bbox="900 1205 1350 1541" data-label="Image"> </div> <p>写真1 収穫期の‘さくらひめ’</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) シクラメンの育苗管理</p>	<p>－鉢花－</p> <p>ア かん水、施肥管理 日照量が多いと萎れやすいため、乾かさないうにかん水する。肥料が切れると下葉が黄色化するため、I B化成肥料を4号鉢で毎月3粒/鉢施用する。</p> <p>イ 摘心 11月上旬に定植し4号鉢で5月中旬に出荷する半促成栽培では、3月中旬に地際部から1cmを残して摘心する。</p> <p><エラータム系></p> <p>ア 温度管理 最低夜温は、12～14℃を確保する。生育が遅れ気味の施設では夜温を高めにし、高単価が期待できる3月上旬から4月上旬に収穫できるように管理する。 日中も通常より高めの温度管理が望ましいが、晴天日にハウス内の温度が25℃を超えないよう換気を確実に実施し、高温による花とび、花散り等の切り花品質の劣化を防止する。</p> <p>イ かん水・施肥管理等 採花期間となるこの時期は、花穂の徒長や軟弱化を防ぐために少量多回数かん水を心がけ、肥料吸収に必要な最低限の土壤水分を保つようにする。施肥管理は、生育が旺盛となる時期であることから、有機配合肥料を2週間おきに、窒素成分で6kg/10a施用する。 ハウス内の換気は‘さくらひめ’一切り花－に準ずる。</p> <p>ア 鉢上げの方法 シクラメンの中鉢（5号鉢）生産では、3月はセルトレイからポットへの鉢上げ時期にあたり、生育ステージとしては本葉が2～3枚展開し根鉢形成期となる。2～2.5号ポットへ移植し、深植えは避け、球根の上部1/3程度を地表に出して植える（写真2）。ポットの用土は排水性・保水性の良い配合土に整え、気相率は25%程度を目標とする。基肥にはリン酸肥料を混合し、pHは6前後に調整する。</p>

項 目	作 業 内 容
	<div data-bbox="603 293 1248 741" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="549 748 1286 786">写真2 ポリポットに鉢上げされたシクラメンの苗</p> <p data-bbox="472 808 762 846">イ 鉢上げ後の管理</p> <p data-bbox="472 857 1382 987">鉢上げ後の温度管理は 16～18℃とし、寒暖の差をつけないようにする。日中はこまめな換気を心がけ、施設内の湿度を下げることで葉柄の徒長や病害の発生を抑える。</p> <p data-bbox="472 999 1382 1368">シクラメンは3月の鉢上げ期以降に一次側芽の形成を開始し、側芽の形成数の多少により出荷時の商品性（花数、葉数）が大きく左右される。特に側芽の確保が不十分な状態で肥料を効かせ過ぎると、葉だけが大きくなり、側芽の新たな分化が抑制される。従って、リン酸、カリ主体の液肥を窒素濃度で 30～50 mg/L (ppm) 程度に薄め、3～4日間隔で施用することで側芽の形成を促す。5月までに、株当たりの一次側芽は4個以上を確保する。</p>

(作成 農林水産研究所)